

弥生時代の九州・邪馬台国 菊池郡山門説 -うてな遺跡-

会員番号 10503 宮崎 政宏

古代の九州は大陸との窓口でした。

特に弥生時代の九州の勢力図がどのようなものであったかを考察することは、その後の日本史を辿る上でも欠かせません。古事記では古代の九州に「筑」「豊」「肥」「熊襲」の4つのグループがあったと記されています。それぞれがどの地域を指し、どのような人々が暮らしていたのかを詳らかにすることが、一向に所在地論の収束しない邪馬台国論争に決着を付け、その後に日本を訪れる古墳時代の解明にもつながって行きます。

これまで考古学、地理学、歴史学、文化人類学など各分野で詳細な研究が行われてきました。考古学的には各地の遺跡発掘が進み、多くの貴重な発見がなされました。地理学的には、地形や地質、そして自然災害が古代日本人の生活や文化にどのように影響を与えたのかが明らかにされつつあります。本稿の目的は、考古学的発見、地名や地理的特徴、文化的背景を統合し、古代日本の全体像を新たな視点から描き出すことにあります。それにより謎に包まれている古代日本の姿を臆気ながらも現代に浮かび上がらせることができれば幸いです。

(各タイトルの詳細は 下記アドレスの Note の記事にて執筆しています)

1. 弥生時代の九州（肥の国・筑紫の国） <https://note.com/airrium/n/nb36afcc784cf>

肥前と肥後の領域に当たる肥の国には縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて支石墓を墓制とする人々に移り住んできました。弥生時代前期から中期にかけては、筑紫の国からもたらされた甕棺墓が肥の国にも浸透していき、一部では支石墓の下に甕棺墓が置かれるなど肥の国と筑紫の国の融和的な時代が築かれます。

2. 弥生時代の九州（豊の国） <https://note.com/airrium/n/n47f1cda9452f>

弥生時代中期に筑肥で隆盛した甕棺墓文化は、宗像以東の当時肥沃であった遠賀川下流域からは出土しません。文献や伝承によると、遠賀川流域は神武以前に中つ国に天下った饒速日、物部の故郷と推測できます。そして弥生時代中期と後期を画期として広形銅矛が登場し、その分布から筑豊に勢力変化が生じます。

3. 南海トラフ巨大地震と高地性集落の出現 <https://note.com/airrium/n/n9a3de423754d>

弥生時代中期と後期を分かち契機となったのは、西暦1世紀に起きた南海トラフ巨大地震でした。瀬戸内海で発生した津波の被害は高地性集落の出現と銅鐸祭祀の放棄という事象を生み、瀬戸内の難民は周囲の国々に押し寄せることになります。神話の素戔鳴の第一次神逐はこの事象を記したものと考えます。

4. 奴王国滅亡 <https://note.com/airrium/n/ne7f8bc493cfe>

須玖岡本を本拠とし、漢から倭国王の称号を得ていた奴王国は瀬戸内と豊の国の連合勢力により滅ぼされ、王を戴かない新生奴国となります。それは須玖岡本から比恵那珂への遷都、王墓の消滅、甕棺墓文化の衰退、銅矛形態と文化圏の変移といった変化を生じさせます。この戦乱の結果は天照と素戔鳴の誓約で記されます。

5. 弥生時代の九州（熊襲の国） <https://note.com/airrium/n/n2cde478289da>

熊襲とは九州南部に住まう球磨、贈嶽、阿多の諸部族の総称であり、弥生後期の筑豊の戦乱は九州南部の勢力図にも変化が起きます。肥国は筑紫の衰退により国力が低下し、熊本中部を球磨勢力に奪われ有明海の制海権が消失します。遙か後に日向となる贈嶽は瀬戸内との交流が主であり北部九州との交流はありません。

6. まぼろしの邪馬台国～その虚像と実像 <https://note.com/airrium/n/n182b22c9a55e>

魏志倭人伝に記される邪馬台国の所在地は江戸時代からの論争を経ても、いまだ卑弥呼のいた場所にたどり着けてはおりません。それは、皆それぞれが思い描く邪馬台国像と現実の邪馬台国との間に齟齬があるからだと推測します。独自の考察を元に、邪馬台国は強国ではなかったことを魏志倭人伝から読み解きます。

7. 邪馬台国 菊池郡山門説 -うてな遺跡- <https://note.com/airrium/n/nd751459c5131>

これまでの推論と地理的要件、建中校尉梯儻の編成、そして菊池郡山門の地名等から、邪馬台国の所在地を熊本県菊池市七城町台（うてな）にある「うてな遺跡」に比定しました。そして4世紀末、邪馬台国は大和王権の神功皇后によって「山門」にいたとされる土蜘蛛討伐によって終焉を迎えることになります。